

令和6年度 地域循環共生圏づくり支援体制構築事業

中間支援振り返りシート（2025.3）

活動団体の活動におけるテーマ

『複数のぼちぼち山業で豊かな生活スタイルで暮らしている人を増やす』

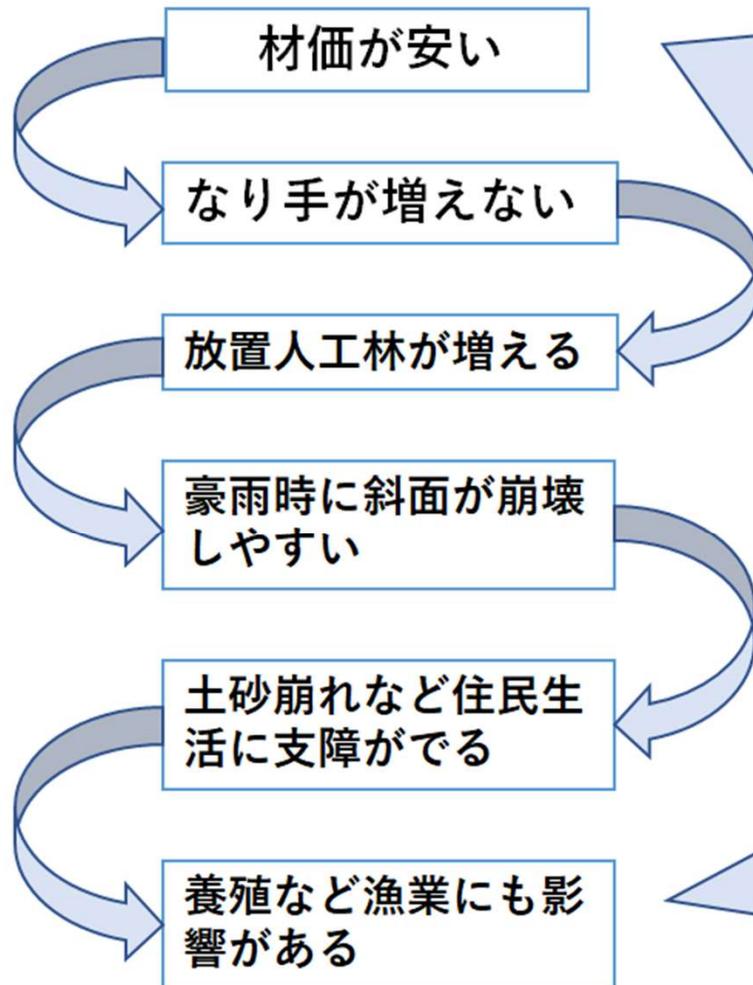
活動団体の活動地域：高知県幡多郡大月町

活動団体名：NPO法人大月地域資源活用協議会

中間支援主体名：四国海と生き物研究室

活動計画（概要）

大月町における林業の現状



- ・ 森林率78%（広葉樹が約60%）
- ・ 放置人工林の間伐は主に森林組合が実施
- ・ ひとり親方の林業従事者は皆伐施業が主
- ・ 優良材は宿毛の共販所に出荷
- ・ C材はパルプ用材または木質バイオマス発電所へ（買取価格の割に売り先が遠いため経費がかさむ）
- ・ 放置人工林はC材が多いので伐ってもお金になりにくい
- ・ 施業しようと思っても山主さんにたどり着かない
- ・ 自伐型での施業にあたって、補助金を活用しようとするより更に作業が多く心がおれる
- ・ 山主さんが山に関心がない

泥水が海に流れると

- ・ 目の色が白くなり商品価値が下がる
 - ・ 塩分濃度が下がるため魚が死ななかつたとしても身が割れ商品価値が下がる
- ここ数十年で海の状態は悪いほうへ変化している（養殖関係者より）

自然環境・生活・経済活動に影響が出る

活動計画（概要）

ありたい地域の姿

ありたい未来

複数のぼちぼち山業で豊かな生活スタイル
で暮らしている人を増やす

◎期待できること

- 放置人工林, 荒廃林の減少
- 林業以外の産業従事者も増える
- 地域経済の活性化
- 町外から買っているエネルギーを町内から買うことができるようになる
- 山を取り巻く課題以外の課題解決にもつながる

- 1. 町内で山林資源を活用・消費ができています
- 2. 山業の担い手が増えている
- 3. 施業地がある

□1. 町内で山林資源を活用・消費ができています

- ・ 町内で山林資源を消費・つかえる仕組みづくり
- ・ 町内事業者へ還元する仕組みづくりができているとさらに良い⇒林業だけ活性化されればよいわけではないから
- ・ _____etc...

□2. 山業の担い手が増えている

- ・ 循環する森づくり、新しい担手の育成ができる仕組み
⇒新規参入者、町内林業従事者の自伐型林業の研修制度、仕組みをつくる
- ・ 「大月町で山の仕事を」生活がイメージできること
⇒知識・経験でやってきた人達にどのように対応するのか？
- ・ _____etc..

具体的な取組

- 西泊地区モザイク林のモデル林づくり⇒新規参入者の研修場所として、また、整備し山を場として活用する
- 情報発信⇒移住を希望している人に「大月町で山の仕事」のイメージを伝える、新たな担手を探す
(R5年度：山の仕事移住インタビュー冊子の作成)

移住者
近隣地域おこし協力隊
大月町森林組合
山師さん

具体的な取組

- 木質チップ工場併設の木質バイオマスガス化発電所の検討
- チップ工場のみまたは、薪ポイラーの普及（外から買っていたエネルギーを町内で生産・消費できるように）
- 町内で生産・消費できるように
- 黒炭の生産（R5年窯づくりの研修）
- すきま事業（薪、キクラゲ、しいたけ、ブレンドティーetc...）
- 森を“場”として活用する（森のレンタル、もりのようちえん）
- 地域商社の立ち上げ検討⇒新規参入しやすくするため
- 町内で取引した材の一部の代金を地域通貨で支払い⇒地域経済の活性化

ぼちぼち山業運営チーム
黒炭をつくりたい人
ぼちぼち作ったものを売りたい人
ひきこもり支援団体
山の遊び場をつくりたい人
お茶をつくりたい人
広葉樹すきまワーカー
薪を生産したい人
キノコを生産したい人

□3. 施業地がある

- ・ 山主さんと持っている山の情報がまとまっている
- ・ 山主さんと山師さんを繋げられる
- ・ 適切な施業方法を提案できる（ゾーニングができています）

地区長さん
山主さん

具体的な取組

- 山主さんのニーズを把握する
- 山師さんのニーズを把握する
- 循環する森づくりを提案・行う
⇒ 山師：若い世代が将来施業地に困らないため
・ 山主：先祖代々受け継いできた財産を守る・後世に引き継ぐため
・ 環境：資源を食いつぶさないため
・ 広葉樹の植樹活動：有用樹種を将来的に活用するため

23年3月 ●町：ゼロカーボンシティ宣言
⇒2050年に排出CO₂0を目指して
2030年までの行動目標を立てる

●地域資源・課題の洗い出し、ありたい未来の設計
仲間集め、事業のタネを考える

山林資源

手入れされていない山が増えている

山の仕事だけでは収入が安定しない

豪雨時に斜面が崩壊しやすくなる

課題

なり手が増えない

町内に仕事が少ない

土砂崩れなど住民生活に支障がでる

山林資源を活用して生業にする人が少ない

土砂の流出は養殖など漁業に影響が出る

山の資源はあるのに活用されていない

⑥担い手・ステークホルダー

⑤成果

④取組・状態

③地域資源

②地域課題

2026年度末の状態目標

1. 町内で雑木・C材の活用が進んでいる
2. 山業のアントレプレナーが大月に移住、新たな移住者が自伐型林業に挑戦している
3. 山側の地区、海側の地区バランスよく声をかけていく

2025年度末の状態目標

1. もし木質バイオマス導入が断念されたら、薪や炭として活用できるよう町内に雑木・C材の卸場所をつくる（薪ボイラー？）、販路が開拓できている
2. 町内山業に関わる人が増えている
3. 他の地区の山主さんにも山づくりの理解が広まっている

2024年度末の状態目標

1. 町内で広葉樹・C材を買い取っている活動が広まる
1. 町内で木質バイオマスガス化発電が検討されている
2. 外の人を巻き込める絵が描けている(木を伐る人だけでなく、山林資源を活用したアントレプレナーが増えて欲しい)
3. 町内一部地区の山主さんの間で山づくりの理解が広まる
現状声をかけてくれた山主さんを対象に

■見立て

活動団体の中心メンバー3人の内2人は10年未満の移住者で、活動地域内の人脈が細い。ひとは地元住民で地域内や町役場内の人脈があり備長炭に関わる人脈もあるが、他分野の人脈は細い。それぞれ専門分野ではエキスパートであり熱意もあるあまり、メンバー相互や地域住民との乖離が起きる心配がある。町役場の動きが鈍く、活動団体との協働や支援が期待できない。

■打ち手

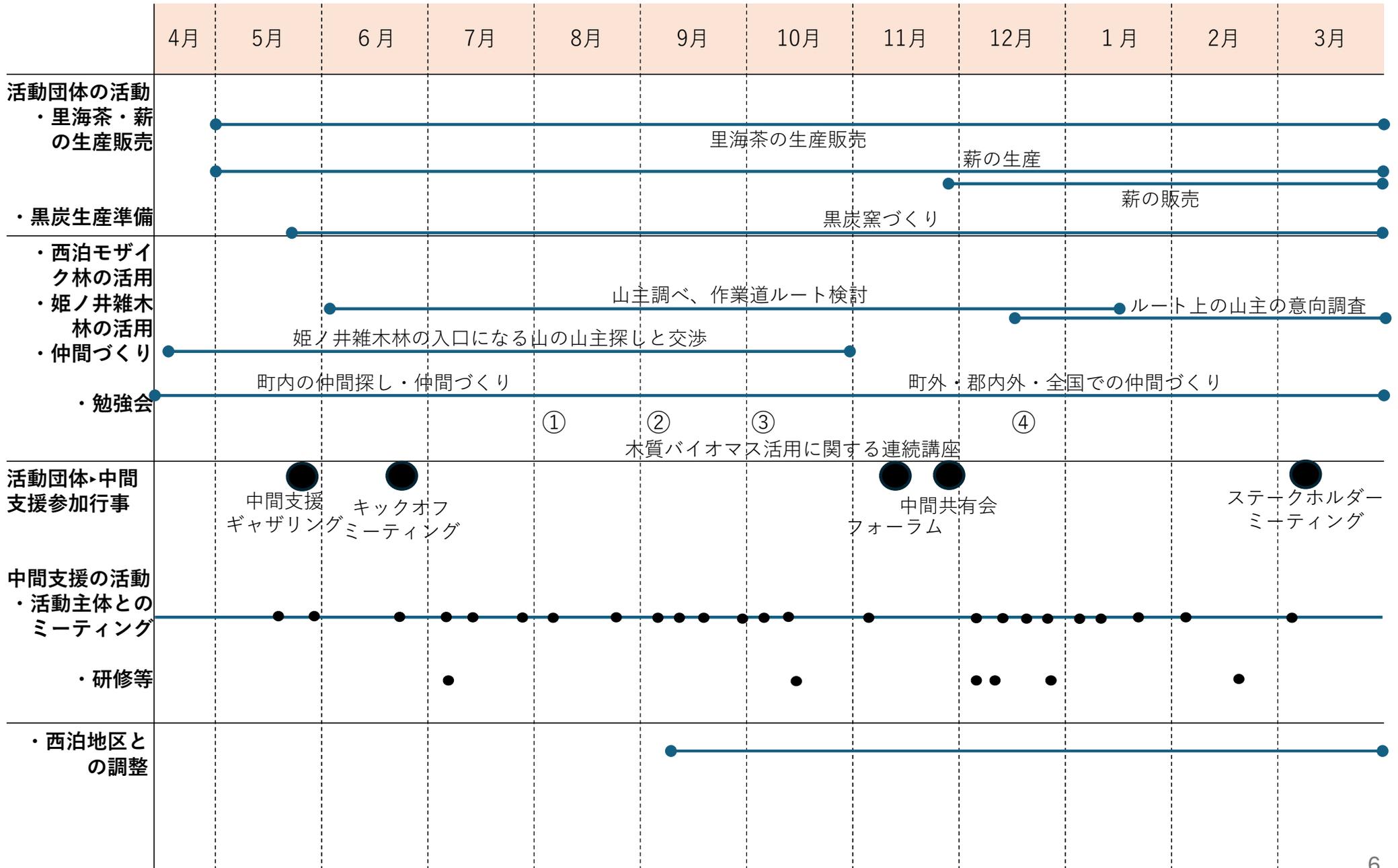
地域内外の人脈やネットワークを活かして、地域住民との調整や外部団体や研究者等の紹介や調整を行う。活動をのバックボーンとなる知識や、県・国などの動きに関する情報を中心メンバーや町役場に、場合によってはかみ砕いて提供する。活動の中心メンバー3人とは個々に密に情報を共有し、メンバー相互や地域住民との乖離や齟齬が起きないようにする。

■中間支援機能の強化・振り返り

これまで主に海域環境や生物多様性、気候変動に関する活動をしてきたので、山林環境や林業、産業振興等に関するネットワークが弱い。四国EPOや環境省四国事務所には、これらに関する事例や団体、行政の動向などを教えていただき、ネットワークを拡げていきたい。また、市町村に対する県や国の補助金や交付金に関する情報が入手しにくいので、関係の情報があれば教えていただきたい。

活動・支援のプロセスの振り返り

■R6年度活動・支援内容



活動・支援のプロセスの振り返り

■今年度、地域循環共生圏づくりのポイントとして注力したアクションサイクル①

行政（町）と活動団体との協働関係の構築

中間支援主体の支援

- 町役場には民間団体と協力して成果を上げるという考え方がほとんどなく、民間からは「○○をやって欲しい」という要求ばかりが寄せられるという先入観があるので、まずそれを払拭してよい関係を作ることから始めなければならない。
- 勉強会では「町が取り組むべき」という感覚ではなく、事例の紹介、理論の解説などに重点を置いた。また行政の立場と民間の立場の違いを相互に理解し、歩み寄れる企画案づくりを提案した。
- 活動団体の行動にも行政の体質にも問題があり、相互に信頼関係が築けていないため、活動団体の活動に理解のある町幹部や町議会議員の力を借りてまず信頼関係を築いていくことから始める必要がある。時間はかかるがぜひやらなければならないことである。

活動団体の取組

- 町との協働体制の構築
- 木質バイオマス活用の取り組みは町の産業振興計画や脱炭素の取り組みに合致しており、行政と民間が協働することにより計画の推進が加速されると考えられるが、町の林業への期待感の低さや予算や仕事量増加への抵抗感から、体制作りが進まない。
- 外部の講師を招聘して木質バイオマスの活用、森林の防災に果たす役割、森林の活用が経済に及ぼす影響などの連続講座を開催し、町幹部の意識改革を試みた。結果として脱炭素部門ではいくらか協力の芽が見えてきたが、産業部門では未だ門戸は開かれない。

活動・支援のプロセスの振り返り

■今年度、地域循環共生圏づくりのポイントとして注力したアクションサイクル①

地域の住民や山主に「山の価値」を知ってもらう

中間支援主体の支援

- 役場の担当課（産業振興課）の協力によって「事業」が起きれば人の目が変わると考えていた。
- 国や県の補助金を使って事業を起こすことを考えていたが、活動組織が薪を積んだことでそれを見た人の意識が変わったことを受けて、西泊のモザイク林に作業道をつけることで津波の避難道ができ、周辺の山林を活用できる形作りができることを示そうと考えた。
- 行政に頼むのではなく、自分たちでできることで目に見える事例を積み上げ、多くの人の賛同や応援が得られれば大きな事業にもつながるという考えが出てきた。
- 25年住んで気心の知れた西泊の山主に、山を使わせてくれないかと頼んだところすんなり同意が得られ、身近な手の届くところで事例を作ることの大切さがわかった。

活動団体の取組

- 活動できる山林や活動してくれる人を増やす
- 多くの町民が「山はお金にならない」と思っており、活動が広がらなかったため、どうやったら山に関心を持ってもらえるかと考えた。
- 薪づくりをはじめ、乾燥のためにラックに大量の薪が積まれたところ、多くの町民が関心を持って協力が得られるようになった。わかりやすく目に見える形で活動を行うことで、人の意識が変わることがわかった。

活動・支援のプロセスの振り返り

- (特に前2スライドの支援を実施するにあたり、) 今年度、力を入れて取り組んだ中間支援は？ (中間支援機能チェックリスト.xlsxより上位3つを選んで記入)

協働ガバナンスの項目	中間支援機能	項目 (番号)	支援をしたタイミング等
協働のプロセス	プロセス支援	(1) ①	必要に応じて多くのミーティングを設定した
チェンジエージェント機能	変革促進機能	(1) ⑤⑦⑨	毎月のミーティングでの対話から必要に応じて

● 共生圏づくりを進めるために、活動団体の能力をどう引き出せたか

活動団体はもともと得意分野では能力の高い個性的な構成員の集まりなので、個々の考え方や活動方針をじっくり聞いて理解し、他の構成員に理解しやすい言葉で伝えることで全体の活動をスムーズに進めることができた。

● 中間支援主体として向上したと思う中間支援機能

活動団体の構成員一人ひとりから満足のいくまで話を聞き、肝になると思われる部分にコメントできるようになった。共通の目標に向かっているが個性の違う構成員相互の感情の行き違いなどは、話を聞くだけでも解消されることが多い。

● R6課題だと感じたこと

活動団体内部の意思疎通は比較的順調に調整できたが、活動の目標を一般の町民や町職員に理解してもらい、援助を得ることはなかなかむつかしい。町役場内部に応援してくれる勢力を作る必要があると考えている。

地域循環共生圏づくりに向けた次のアクション

- **地域循環共生圏づくりのために、どのような中間支援機能を発揮できるといいと考えているか。R7～中間支援主体として今後どのようになりたいか。**

大月町のような少子高齢化の進んだ過疎地域では、「日常」に変化をもたらすことに警戒感が強く、活動団体のメンバーやステークホルダーが常に不足して、活動がなかなか広がらない。

そのため中間支援としては常に内外にアンテナを広げ、ステークホルダーになりうる主体や、仲間づくりに役立ちそうな人／組織／活動を幅広く活動団体に紹介すると共に、地域社会や自治体に活動団体の活動を紹介し理解と協力を促すことが重要だと考える。

また、活動団体の人的資源の不足を補うために、中間支援といえども時には踏み込んで活動に参画することも必要だと考える。

- **活動団体がアクションサイクルを回せるようにするための次年度の見立て・打ち手（具体的な支援策）**

次年度以降支援の予算はなくなるが、活動団体の一部門として支援を継続する予定。

次年度の活動団体の活動は、①薪と里海茶の生産販売による活動資金の調達、②秋以降に黒炭の生産を始め、生業となることを示す、③木質チップの生産体制の検討と販売先の開拓、④戦後放棄された畑が雑木林になった集落の後背林の、ネイチャーポジティブかつ経済的に持続可能な活用方法の検討、が主な内容になる予定。

そのため、①地域商社としての活動をNPO法人の一部門から独立経営にする道筋の検討、②自身が黒炭生産者のロールモデルとなる、③自治体や出資者との連携体制づくりや販売先の提案、④山主、地域住民、集落自治組織と活動団体の橋渡し役になる、として支援を継続する。

- **地方・全国事務局にサポートしてもらえると嬉しいこと**

仲間づくりと仕組みづくりで3年たってしまい、ようやく事業化の糸口がつかめたところなので、今後は地域商社としての経営に関する支援プログラムがあれば紹介してほしい。また、地域循環共生圏づくりの参加者が全国でどんな取り組みをしているのか、web上でよいので定期的に知ることができる仕組みがあるとよい。活動や支援の幅を広げるためには多くの事例や人脈を知っていることが重要なので、EPOも含めた中間支援団体間のネットワークがあれば大変有用だと考える。